

大学入試センター試験および国公立大二次・私大

大学入試 分析と対策

2013 平成25年度

英語

学校法人 河合塾

英語科講師 江本 祐一

林館啓

この冊子の内容は次のURLからもアクセスできます
<http://www.shinko-keirin.co.jp/keirinkan/tea/kou/eigo>

1. センター試験

(1) 筆記試験

出題内容、出題形式ともに12年度と大きな変化はない。第3問B、C、第4問A、第6問で若干語数が増えたために、総語数は4,251語。10年の3,343語から、11年(3,764語)、12年(4,046語)と漸増し、09年(4,294語)の水準に戻った。平均点は12年度の124.15点から119.15点に下がり、6割にわずかに満たなかった。全体としての難易度は12年と同じ程度であることを考えると、約200語の語数の増加が平均点が下がった原因であろうか。第6問Bで設問数が1つ増えたために、全体のマーク数は12年度の54から55に増えたが、第6問全体の配点は36点で変わらない。大問ごとの配点は12年度と同様で、第1問：14点、第2問：41点、第3問：46点、第4問：33点、第5問：30点、第6問：36点。音声に関する問題の配点が14点、文法語法系の問題の配点が41点、残りの145点が読解系の問題で、読解力重視の傾向が続いている。

第1問

Aが発音問題、Bが音節分けのないアクセント問題という点は12年度と同じだが、発音問題とアクセント問題の出題数が12年度と逆になった。また、アクセント問題で見出し語がなくなり、10年度と同じ形式に戻った点で少しだけ出題形式が変わっている。発音問題は母音の発音を問うもの1題と子音の発音を問うものが2題ずつの出題。黙字のtが問3で問われている。発音問題、アクセント問題共に、読解問題などで見慣れた単語の出題で、比較的解答しやすい問題だった。発音問題ではgenius, medium, meter, serious, symbol, castle, title, turtle, アクセント問題ではpercent, success, energy, essential, photograph, dynamic, hamburger, operatorなど、いわゆるカタカナ語が12年度以上に多く出題されているのも13年度の特徴。これらのカタカナ語も含めて、日頃から正しい発音、アクセントを心がけておくことが必要。

第2問

Cで解答箇所が2つめと4つめの空所に変わった点を除けば、12年度と同じ形式。

Aでは文法の知識そのものを問う出題は問3の助動詞の区別、問4の未来における完了形の問題、問

7の前置詞と接続詞の区別の問題のみで、語彙や語法、イディオムの表現の知識を問う問題が大半を占めている。12年度のverticalが正解となるような語彙レベルの高い問題の出題はない。その意味では取り組みやすかったのではないだろうか。正答率が比較的低そうな3問を取り上げる。

問1 I understand of our students are working part-time in the evening to pay their school expenses.

- ① almost ② any ③ anyone ④ most

問9 When my younger brother and I were children, my mother often asked me to keep him so he wouldn't get lost.

- ① an eye on ② away from
③ back from ④ in time with

問10 I was offered a good position with a generous salary, but I decided to turn it because I wanted to stay near my family.

- ① around ② down ③ out ④ over

問1は、almostとmostの区別を問う問題。「学生のほとんどが…」と意味を取って①を選ぶミスが考えられる。後にof…と続いていることから、空所には名詞や代名詞が必要であるが、almostは副詞であるので正解とはならない。これは文法問題や英作文で頻出の項目だが、品詞の意識が薄い受験生には難問かもしれない。

問9はkeep an eye on Aというやや馴染みが薄い熟語を問う問題。②でも文法的には成立するが、文意を成さない。

問10はturn down「(申し出など)を拒む」が正解。①、③、④のいずれを入れても熟語としては成立するが、文意が通るのは②だけである。問題文全体の意味を正しく理解することが必要。なお、本問ではturn itまでが与えられているが、turn downのように「他動詞 + 副詞」の群動詞に関して、代名詞が目的語になる場合の語順が10年度に語句順序の問題で問われた。他の要素も絡んで、河合塾の再現答案での正答率は7.7パーセントと低かった。この点にも備えておきたい。

今年の出題には当てはまりにくいことではあるが、例年、この第2問Aでは、文法の問題集ではあまり目にする事のない出題パターンの問題や熟語が問われることが多い。その意味で、第2問Aをきちん

とこなすためには、語彙や語法、慣用的な表現の知識の強化という点でも、様々な英文を読む中で自然に身につけるように心がけるべきであろう。とは言え、直接的に問われることは少ないにしても、英文法の知識は英文を読み書きする上で必要不可欠である以上、基本的な問題集を1冊仕上げておきたい。

Bの対話文完成問題では例年通り、対話の流れから正解を得る問題が中心で、特に会話の定型表現を問う問題は出題されていない。問1は空所の前、問2では空所の前後、問3では対話全体の内容を決め手に解答を導く。

Cの語句整序問題は、09年以降、少しずつ形式が変化してきたが、13年度は選択肢が5つで、2番目と4番目を答える、という08年度以前の標準的な形に戻った。倍数表現、owe A to Bとwhat I am、形容詞＋enough to doが13年度の出題内容で、比較的やさしい問題だった12年度以上に取り組みやすい問題となっていた。

第3問

Aは語句の意味を類推する問題、Bは発言の趣旨を選択する問題、Cは文補充問題の出題。

Aではto call the shots(問1)とepitome(問2)の意味が問われている。問1ではLukeの最後の発言If someone suggests a different idea, Bob always ignores it or gets angry.を決め手にhave controlを選ぶ問題であるが、センター試験直後に話を聞いた受験生によると、この問題がわかりにくかったと答えた生徒が最も多かった。例年指摘している通り、日頃から、予習の段階ですぐに辞書を調べるのではなく、まず文脈から意味を推測してみる習慣をつけさせることが対策となる。

図書館の駐車場横の空き地の利用法についての住民の議論を扱ったBは、解答と無関係な短い発言が入っている点では従来と異なるが、直前の発言の内容の要約問題であるという点では従来通りの出題。例年指摘の通り、教科書の英文の内容をパラグラフ単位で要約する練習や、私立大学で見られるパラグラフ対応の内容一致問題などが、対策として利用できる。

インディアナ州の標準時を扱ったCは、初めてイラストが登場した。本文の理解を助けるための地図で、直接解答に関わるものではない。③2、③3はそれぞれ空所の含まれるパラグラフの内容をまとめた文を入れる。③4は前文との意味的なつながりを意識して、howeverかthusかで選択肢を絞り込

み、直後のThis debateの内容が必要であることから、解答を選ぶ。

例年通りの出題内容だが、設問を含めた語数が、12年度は356語であったのに対し、13年度は512語で、約1.5倍に増えているという意味では、難度が上がっているが、例年指摘している通り、いわゆるdiscourse markersを意識して、内容の展開を意識しながらパラグラフ単位で英文を読む習慣がついている受験生は比較的正確な解答を得やすい。Bの対策として培ったパラグラフ単位で要約や小見出しをつける練習がここでも有効であろう。200点中46点という最大の配点比率を占める第3問全体に対する苦手意識を払拭することが、センター試験で高得点を取るには重要である。

第4問

Aは「世界各国の医療従事者数と医療費」を扱った表のついた読解問題、Bは「写真スタジオの広告」の読み取り問題が出題された。

Aでは、グラフと表の差はあるものの、項目を特定する問題が出題され、本文中の空所補充問題がない点は、12年度と同じ。11年度の385語から12年度に510語に、そして13年度には550語へと増加している。難易度は12年度と同程度。

Bは10年度、11年度と同様に広告文の出題。文字情報の読み取りが解答の決め手となる点は11年度と同様だが、広告の文字数自体は350語から296語に減っている。ただし、問2ではやや複雑な計算が必要となる点で、全体としての難易度は12年度と同程度。

第5問

12年度は、2人の人物の別々の状況(留学体験)に関するスピーチについての問題であったが、13年度は「映画紹介サイトに投稿されたある日本映画についての感想」に関する問題で、10年度、11年度同様に、同一のものに関して2人が述べた英文を扱った問題になっている。内容把握に関する問題が4問、イラスト問題が1問である点は同じだが、映画の場面を並べかえる問題である点は新傾向。この問題が出題された10年度(545語)から、11年度は787語、12年度は832語と、語数は増加傾向にあったが、13年度は821語。内容も設問も取り組みやすい問題。

第6問

10年度以降、一貫して論説文が出題されている。13年度は「ダンスの役割」を述べた論説文が出題

された。12年度は、本文中で説明されているとは言え、procrastinationという馴染みのない単語がキーワードとなっていたが、13年度は「ダンス」という比較的身近なテーマである。語数はほぼ同じ(12年度は833語。13年度は841語)。11年度に新しく出題された「段落の要旨の並べかえ」が、12年度にはB問題として独立し、段落ごとの選択になったが、13年度はこのB問題の設問数が1問増えたために、マーク数自体は増えているが、受験生の負担に変化はない。A問題の5問中4問が段落指定のある問題、1問が筆者の主張を問う問題である点は12年度と同じ。A、B共に段落単位での内容理解を試す問題なので、段落単位で丹念に読み進めることで解答は得られる。ある程度のスピードで、段落を1つの単位として理解しながら読み進めていく力を養ってきた受験生にとっては、比較的落ち着いて取り組める出題であった。

例年、本稿で指摘している通り、読解力の強化には、文法的知識と語彙力を高めるとともに、論説文をはじめ、エッセーや物語文を含めて、様々なタイプの英文を読むことが必要である。その際にはよくわからない部分があっても、少なくとも1つの段落は最後まで読み切り、全体の内容を把握する訓練が効果的であろう。そのためには、比較的やさしめの入試問題で段落ごとに内容一致問題がついたものなどを利用することが考えられる。また、読解系の授業の予習の際は、あらかじめ生徒に制限時間を告げておき、まずは辞書なしで英文を読み、設問に答えさせる練習、つまり「予習は模擬試験だ」という姿勢での練習も効果的であろう。私自身の場合、生徒には、「予習段階で辞書を使う際は調べたい単語の半分だけを調べ、調べた単語は絶対にその場で覚えること。残りは文脈から推測すること」という指導をしている。外国語である以上、未知の単語があるのは当然のことで、それにいかに対応するかという訓練をさせるという意図であるが、第3問Aなどでは、直接役に立つはずである。また、一度読んだ英文を繰り返して読む、という訓練を嫌がる生徒もいるが、既習英文を繰り返して読むことで、読解のスピードが上がるとともに、語彙力の定着にも効果的である。その意味で、授業で扱った英文や自分が問題集等で読んだ英文は繰り返して読むように指導すべきであろう。これらはセンター試験に限らず、国公立大の二次試験や私立大の問題対策にも有益なは

ずであるし、たとえ入試で英語が必要なのはセンター試験だけ、というような生徒にも総合的な力を高めさせる指導が必要であろう。

(2) リスニング試験

出題形式、出題内容、マーク数配点のいずれも、例年通りの出題。読み上げられた語数は12年度は1,165語、13年度は1,136語で、ほぼ同じ。設問と選択肢の語数は、11年度の602語、12年度の520語に対して13年度は503語。平均点は11年度の25.17点、12年度の24.55点に対して、31.45点で、07年以来久しぶりに6割を越えた。12年度同様に、複数の情報を整理した上で解答を導き出さなければならない問題や、選択肢の吟味にやや手間のかかる問題の出題はあるものの、発話内容を理解できれば素直に解ける問題が多くなっていること、場面設定が把握しやすくなっていることなどが、平均点が上がった原因であろう。12年度の河合塾の再現データでは問9、問22、問25の正答率が3割を割っていたが、13年度はそのような正答率が異常に低い問題はなさそうである。

まずは、対話文を聞いて適切なイラストを選択する第1問から、数字の聞き取りを含む問4と問6を取り上げる。例年、数字のからむ問題が第1問での正答率の低い問題となっているが、13年度は素直な出題であった。

問4 Which is the current score?

- ① 1 - 2 ② 2 - 3
③ 2 - 4 ④ 3 - 4

[読み上げられた英文]

W: How's the soccer game going?

M: Well, the Bears have two goals, but they're behind.

W: There're 14 minutes left. They still have a chance.

M: Yeah, two more goals to win the game!

2回の男性の発言の理解が決め手となる。1回目の the Bears have two goals, but they're behind から、the Bears は「すでに2点取っているが、負けていること」、2回目の two more goals to win the game から、「勝つためには2点必要であること」の2つの情報を聞き取り、解答を選ぶ必要があった。

問6 How much will they pay for the shoes?

- ① \$ 40 ② \$ 50
③ \$ 60 ④ \$ 80

[読み上げられた英文]

M: Look! Forty dollars a pair for all kids' shoes.

W: That's a bit expensive.

M: But there's a 50 percent discount on the second pair.

W: Oh, in that case, let's get two pairs.

2回の男性の発言の理解が決め手となる。1回目の Forty dollars a pair for all kids' shoes. から、「1足 40 ドルであること」、2回目の there's a 50 percent discount on the second pair から、「2足目は半額であること」の2つの情報を聞き取り、最終的には女性の最後の発言 let's get two pairs から、「2足買う」ということを聞き取った上で、計算する必要があるが、聞き取るべきポイントが明確で、計算も複雑ではない上に、forty を fourteen と聞き間違えた場合に得られるであろう「21 ドル」という選択肢もなかったことなどからも、取り組みやすかっただろう。このように、13年度の問題は、出題の形式面では12年度の問題を踏襲しながらも、かなり正解を導きやすい出題となっている。

対話文を完成させる問題の第2問では、問13が慣用表現を問う問題。問11が解答を絞りにくい問題だった。

問11

- ① Did I see you last week?
② Do you want me to collect them?
③ OK, be sure to remind me again.
④ You didn't turn yours in yet.

[読み上げられた英文]

M: That's all for today, class. See you next week.

W: Excuse me. Aren't we supposed to turn in our assignments today?

M: Oh, that's right. Thanks for reminding me.

「今日は宿題の提出日ではありませんでしたか」という女性（生徒）の問いに対して、「そうだった。思い出させてくれてありがとう」と男性（教師）が答えている。これに対する女性の応答を選ぶ問題。

特に解答の決め手となる事柄はなく、消去法で②を選ぶが、疑問文であることや、この応答自体やや予想しづらいものである点で、正答率は低いのではないだろうか。対話完成の問題で消去法を用いることは多々あるが、選択肢を読む時間が限られているリスニング問題では、そのものずばりという選択肢がない問題では、戸惑う受験生も多いようで、聞き取る力に加えて、英文を素早く読んで理解する力も、リスニング試験で高得点を取るためには必要である。なお、昨年指摘した通り、第2問は、 $A \rightarrow B \rightarrow A$ のやりとりが続く B の発話を選ぶ対話文の完成問題であるが、最後の A の発話が疑問文になっているものは7問中1問。これは12年度も13年度も同じであるが、単純な疑問文に対する応答の選択になっていない点で、良く考えられた設問になっている。

最後にやや長めの英文の内容把握問題である第4問 A の問22を取り上げる。

問22 According to the speaker, which is true about urban farming?

- ① It makes the city feel like the country.
② It requires modern transportation systems.
③ This American business is not a new idea.
④ This way of farming is not good in winter.

[読み上げられた英文]

Growing food locally in American cities has been getting more popular recently. In fact, the vegetables you buy in the supermarket may be grown just down the street. Shoppers may be surprised, but actually urban farming has deep roots, especially in the northeastern US. Before we had good highways and air transport, fruits and vegetables were often grown in city greenhouses during the winter, instead of being shipped in from faraway states or other countries. Because it reduces transportation costs and provides people with fresh food more quickly, urban farming is making a comeback.

正解の③に含まれる not a new idea は、読み上げ文の最終文の a comeback を言い換えたもので、単に聞き取るだけでなく、その内容を正しく理解する必要がある。正解の選択肢に含まれる This American business や、決め手となる not a new idea といった単語は読み上げ文中に出てこないが、「都市部での農業」というテーマから短絡的に①を選んだり、Before we had good highways and air transport という部分から、「幹線道路や空輸などが整備される以前は」→「このタイプの農業はできなかった」→「このタイプの農業には交通機関の整備が必要」と考えて②を選ぶミスが考えられる。情報量が多い上に、which is true? というタイプの設問であるために、きちんと英文全体を聞いて理解しようとせず、聞きとれた単語を手がかりに解答を導こうとする受験生には難しい問題であろう。このタイプの問題は従来から何度も出題されている。本当の意味での聞き取りとはこういうものであるべきで、好ましい傾向である。

リスニングテストでは、例年本稿で指摘している通り、落ち着いて最後まで聞く姿勢が必要で、平常心で試験に臨めるレベルにまで聞き取りの力を高めておかなければならない。対策としては、①かなりの部分が聞き取れるようになるまで文字を見ないで繰り返し聞く。②問題に答える。③文字を見て、聞き取った内容を確認する。④書き取る、という一連の練習を積むのが望ましい。①でいう「かなりの部分が聞き取れるようになるまで」というのは、個人的には「9割がた聞き取れるようになるまで」と考えている。やはり未知の単語や表現は聞き取ることができないであろうから、そのようなものを除いた部分全てが聞き取れるまで、ということである。また、④の書き取りまではセンター試験では必要ないという意見もあるだろうが、書き取ることによって、聞き取りに対する自信が深まること、語彙力や文法力の向上（聞き取れなかった部分を文法の知識で修復する）や、正しい綴りの定着につながるなど、その効果は大きいと思う。

選択肢の英文をあらかじめ読んでおくことなど、リスニング問題には読解力が影響を及ぼす要素も大きい。13年度は、第2問でポーズの時間がやや長くなり、選択肢も短くなるなどの配慮がなされている。しかし、そもそも読み上げられた速度で英語を理解できなければ、対話に続く表現を決めることもできないし、聞き取った英語が言い換えられた選択

肢が正解となる問題には対応できない。正しく速く読むということは、リスニング問題で高得点を取るためにも必要である。そのためには、筆記試験のところで述べた既習英文の反復読みが効果的である。

2. 国公立二次試験

(1) 概観

まずは、13年度の主要な国公立大で出題形式や内容について変化があったものを取り上げる。

東京大学では、1(B)の段落整序問題が文補充問題に変わった。2(A)では12年に出版された語彙問題が従来の自由英作文に戻った。写真に映っている2人の人物の会話を自由に作る、というこれまでにない出題であった。また4(A)の文法問題は誤文指摘がしばらく続いていたが、語句整序問題が出題された。さらに4(B)では下線部和訳問題に加えて内容説明問題が出題された点も変更点である。

京都大学では、12年度に突発的に出題された下線部の言い換え問題がなくなり、読解問題は従来の下線部和訳のみの出題に戻った。

名古屋大学では、読解問題3題、英作文問題1題という問題構成は変わらないが、読解問題の総語数が約500語増加した。英作文の問題が従来に比べると難化している。

九州大学では、12年度に読解問題の語数が約300語増加し、受験生にとってかなりの負担増であったが、13年度は逆に約200語減った。出題形式・内容は、読解問題3題と自由英作文、和文英訳が各1題ずつで、例年通り。

東北大学では、12年に新たに導入された読解問題中の自由英作文と日本語による要約問題が踏襲された。

一橋大学では、12年に導入された300語程度の英文を用いた、文法的誤りの修正問題がなくなり、不足語のある語句整序問題が出題された。自由英作文は例年通り3つのトピックの中から1つを選んで120語から150語の英文を書くものだが、全て Explain why this is true? という設問であった点は例年と異なる。

筑波大学では、「地質学」を扱った読解問題中でグラフを用いた問題が出題された点が目新しい。12年度に自由英作文から、和文英訳問題と語句整序問題に変更されたⅢは、13年度はⅣ(A)空所補充、Ⅳ(B)自由英作文(課題文に反論する英文

を 80 語程度で書くもの) が出題された。

岡山大学では、12 年度に続いて下線部和訳問題は出題されなかった。また 12 年度には読解問題の中に和文英訳問題が出題されていたが、この出題はなくなった。

(2) 読解問題

国公立大学の二次試験では、内容説明や和訳などの記述問題が中心となるが、二次試験で出題される英文のレベルそのものはセンター試験の第3問や第6問のレベルと大きく変わらないことが多い。和訳問題でも、従来のように複雑な構文を読み解く、という作業はそれほど必要ではなくなった。複雑な文構造の把握力が求められているというよりは、比較的平易な文の構造を正しくつかむことが求められており、合格のためにはかなりの精度で和訳できる必要がある。

例年、本誌で取り上げている京都大学の問題を取り上げる。13 年度はⅡの読解問題は 09 年に続いて American Scientist 誌からの出題であった。

Ⅱ (2) It is of such common domestic frustrations, if not absolute failures, that everyday inventions are born. Typically, first attempts to fix a problem begin with improving the existing technology with the aid of devices that serve the purpose at hand. 日常的な工夫が生まれるのは、そのような、家の中でのよく起こる、絶対的にどうにも出来ないものではないにせよ、苛立たしい出来事からなのである。普通は、問題を解決しようとする最初の試みは、当座の目的に間に合う道具の助けを借りて、今ある技術を改良することから始まるのだ。

第1文は強調構文。これは be born of 「…から生まれる」というつながりが見抜けることが前提。be born from であればほとんどの受験生が対応できたはずだが、It を形式主語と取り that 以下を真主語、of such ... frustrations を補語になる形容詞句と考えてしまった、という受験生の声があった。これでは文意が成立しない、ということに気づいて欲しいところ。if not absolute failures という挿入句の文法的な処理は、京大受験生のレベルであれば大丈夫であろうが、absolute failures や common domestic frustrations, everyday

inventions などは、訳語の選択に工夫が必要であろう。第2文は全体の構造把握は比較的容易だが、serve the purpose at hand を上手く訳せるかどうかポイントである。強調構文がとれたかどうかという点では、構文把握レベルでの差がついたと思われるが、他は内容を理解した上での訳語選択で差がつく。同様に訳語の選択がポイントとなる箇所は他の下線部にも多く見られた。英語自体は読みやすく、内容もわかったが、日本語で表すのが大変だった、というのがこの問題の特徴であった。

また、記述問題が出題の中心である国公立大学でも、空所補充問題や、下線を引いた語句の意味を問う問題が出題されていることは言うまでもない。和訳問題であれ、空所補充問題であれ、語義を問う問題であれ、未知の単語が含まれることも多い。センター試験の第3問 A にも通じることだが、外国語である以上未知の単語が含まれるのは当然、という態度で、文脈の中で単語の意味を考える、という訓練も絶対的に必要である。

(3) 表現問題

例年指摘している通り、表現力を問う問題には、東京大学に代表される自由英作文の流れと、京都大学に代表される従来の和文英訳の流れがある。13 年度の出題に基づいて述べれば、自由英作文では、あるテーマについて自分の意見を述べるもの(京大・大阪大・九州大・広島大・北海道大など)から、英文や日本語を読み、その内容について意見や感想を述べるもの(筑波大・神戸大・金沢大)、あるいは要約するもの(東北大)、写真や図表から読み取った内容を述べるもの(東京大、広島大)、あらかじめ伝えるべき内容が設定された上で、英文の一部を補充するもの(北海道大・金沢大)、など、多岐にわたる。また、大阪大学や岡山大学などのように、和文英訳と自由英作文の両方を出题する大学もある。

金沢大学のⅣを挙げる。和文英訳と自由英作文の融合問題で、神戸大学もこれに類する問題である。

(前略)

世界では、18 歳選挙権が主流だが、日本や韓国をはじめ、いくつかの国では、20 歳からの選挙権制度を続けている。いずれにしても、もろもろの権利が 18 歳からスタートすると、18 歳の社会行動や消費行動を取り巻く環境も一変する。(『朝日新聞』〔2009 年 11 月 3 日〕より)

一部改変の上、引用。)

問1 下線部を英語に訳しなさい。

問2 あなたは、日本で選挙権を持つ年齢を18歳からとすることに賛成ですか、反対ですか。(中略) 40語から50語の英語で述べなさい。

「選挙権を持つ年齢を18歳からとすることの是非」を問う問題は、今後も他大学での出題が予測される。「今までに学んできたことで最も大切なこと」(東京大)、「青春時代に大切に考えること」(神戸大)、「グループ活動で学んだこと」(九州大)など、ある程度までは予め準備しておける問題が多く、今後も同種の内容の出題は考えられる。自由英作文に関しては、インターネットや携帯電話の功罪、将来の夢、ことわざの説明、「無人島に持っていきたいもの」(12年度の広島大)、日本独自の文物の説明(11年度の広島大の「沈黙は金なり」、10年度の岡山大学の「あいまい」)など、既出のテーマの練習から入るのが効果的であろう(今年の大阪大学の「タイムマシンを利用したいか」という問題は、以前に広島大学で類似の問題が出題されたものであった)。特に初めのうちは、具体的に書くべき内容を教師の側である程度まで挙げてやることで、何を書いているかわからない、という自由英作文以前の問題も回避できるのではないかと思う。

紙面の都合で、例年取り上げている京都大学の和文英訳問題は割愛するが、今年は「南半球」「星座」「航海」など、語彙面で難しい問題が出題されている。

例年指摘している通り、自由英作文であれ、和文英訳であれ、生徒の書いた答案を添削するだけではなく、もう一度書き直させることが絶対に必要であるが、その際には、教師が添削する前に、自分が書いた答案を自分で添削する、という作業、あるいは生徒同士で添削させるのも有効であろう。自分の書いたものであっても、改めて客観的に見直せば、内容的な矛盾点や、三単現のsの漏れなど基本的なミスにも気づくものである。もちろん、その後で、教師が目を通す必要があることは言うまでもない。また、生徒は自分の書いた英語の正しさを気にするが、教師レベルで辞書を引かなければ正しいかどうか

かの判断がつきにくい表現を無理に使うよりも、正しい表現、その文脈でふさわしい表現は正確に覚えさせ、的確な表現を増やすよう指導する必要がある。

3. 私立大学

私立大学では13年度も圧倒的に客観式の問題が中心であった。空所補充、下線部の言い換え、内容一致などが中心的な出題の形式である。空所補充や言い換え問題では、単語や熟語等の語彙的知識をそのまま問う場合と、文意を把握した上で、未知の(あるいは難解な)語句の意味を推測する必要がある場合があるので、基本的な語彙力の強化と、英文内容の理解力を高めておく必要があるという点で国公立大の場合と違いはない。国公立・私立を問わず、近年読解問題の長文化が進んでいるが、選択肢中心の私立大の問題は、1題の英文量が多いだけでなく、問題数が多いのも特徴であり、限られた時間内で設問に答えるトレーニングが絶対に不可欠である。紙面の都合上、具体的な問題を挙げることはできないが、大学によって独特な選択肢を作る大学があるので、受験大学の過去問演習は不可欠であるのは、言うまでもない。

また、表現力を問う問題として、200語程度の英文の要旨を1文で表す問題(早稲田大文化構想学部・文学部)、与えられたテーマについて意見を述べる問題(早稲田大法学部・政治経済学部・国際教養学部/慶応義塾大医学部・経済学部)、対話文の完成問題(慶応義塾大経済学部)などが出題されている。これらの英作文に対する対策は、国公立大学に関して述べたことがそのままあてはまるだろう。

■江本祐一(えもと・ゆういち)

東大、京大、医進の授業を主に担当。長文読解、京大英文解釈、京大英作文、医進英語などのテキスト、京大入試即応オープン作成メンバー。出版物は「英語暗唱文ターゲット450」(旺文社)、「入試英単語の王道」(河合出版・共著)、「センターはこれだけ」(文英堂・共著)など。

林啓館

URL <http://www.shinko-keirin.co.jp/>

〒543-0052	大阪市天王寺区大道4-3-25	TEL.06-6779-1531	FAX.06-6779-5011
〒113-0023	東京都文京区向丘2-3-10	TEL.03-3814-2151	FAX.03-3814-2159
〒003-0005	札幌市白石区東札幌5条2-6-1	TEL.011-842-8595	FAX.011-842-8594
〒461-0004	名古屋市東区葵1-4-34 双栄ビル2F	TEL.052-935-2585	FAX.052-936-4541
〒732-0052	広島市東区光町1-7-11 広島CDビル5F	TEL.082-261-7246	FAX.082-261-5400
〒810-0022	福岡市中央区薬院1-5-6 ハイビルズビル5F	TEL.092-725-6677	FAX.092-725-6680